
祖父の日記より（ルオーの母子を画く）


祖父画《忙中の食事》油彩（1947）


祖父アトリエ（1982）

その概念を理解してもらうために必要なことは何でしょうか？

地道に与えられた場で精進する、その一語に尽きると思います。

私の専門分野でいえば、歴史的なものの見方を学ぶ際に客観的なデータを読み解く力と、感覚的な受容力を伸ばす方向とのバランスをとることが課題です。ある時偶然のきっかけから、長い間研究対象としてきたステンドグラスの「写し」を作る事にしました。

２００６年夏休み、シャルトルの工房に通って13世紀の窓の断片を模写しながら、初歩的な技法を学ぶ機会を得ました。自分で線を引き、ガラス片を切って鉛枠に挟み込む、小学生の工作時間のような体験でしたが、作品の模写作りに挑戦したことで、その後新たな研究主題に出会うことができたのは幸いです。情報量の多い時代だからこそ、逆にFace to face を尊いものと実感した次第です。

掛川市における文化振興、また公共文化施設の役割は今後どのようにあるべきでしょうか？

地元の伝統文化に根差した無理のない風土設計を考えて、施設等の企画・運営にあたる事ではないでしょうか。例えば、ステンドグラス美術館が日本で最初に出来たという強みを活かして、展示ガラスの誕生の地である英国やフランスなどの土地や風土を紹介したり（既になされたかもしれませんが）、シンポジウムやイベントを企画して世界にむけて発信するなど、特に意欲的な若手を登用して人材育成をする、恒常的に予算をあてて持続可能な基盤作りを大事にするなど、長い目で手元にある宝物を守る姿勢が大切であろうと思います。

私自身は今本務校の清泉女子大学で「創立70周年記念行事」の企画を担当しています。英国から明治10年に来日して、日本でその生涯をおくったジョサイア・コンドルの晩年の邸宅建築を本館として活用しています。貴重な文化財の中で若い学生達が成長するのを見守るのはとても楽しいです。決して過去の遺産を守るだけでなく、日常の営みを包み込んで初めて、生命体として真に建物は活きるのだと実感しています。


聖ヨハネとキリスト、シャルトルの窓《Baie48》の写しを作る


ステンドグラスの絵付け作業（2007）

高野禎子さんプロフィール

清泉女子大学教授
1984年お茶の水女子大学大学院博士課程単位取得満期退学後、文教育学部助手を経て、1997年より清泉女子大学文学部着任、2004年より現職。西洋中世美術史専攻、特にステンドグラスの歴史を研究。
主な業績
「シャルトル大聖堂の薔薇窓」（『名画への旅』第4皖寛（共著　講談社）1992年、「覚え書　サント・シャペルの薔薇窓」（『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』）第24巻、2016年。